

歩くと物体に衝突してしまう半側空間無視患者への介入 - 左側の外空間と身体空間を認識して行為するために -

○森岡 啓太¹⁾ 久岡 由依¹⁾ 沖田 学^{1,2)} 加藤 大策^{1,2)}

1) 愛宕病院 リハビリテーション部

2) 愛宕病院 脳神経センター ニューロリハビリテーション部門

【はじめに】

歩行する際、物体に衝突してしまう半側空間無視を呈した症例に対し認知運動課題・注意課題を行った結果、歩行時の無視症状が軽減したことを報告する。

【症例紹介】

症例は右MCA領域の脳梗塞を呈し約1カ月経過した70歳代女性である。左片麻痺（Br.stage：左上肢Ⅲ左下肢Ⅳ）を認め、体性感覚は左上下肢に軽度～中等度の低下を認めた。10m手引き歩行は快步45秒46歩で、歩行観察からは頸部右回旋・視線は右側に向き、左側の物体に衝突したり、左側から急に人が現れた時に反応できなかつたりした。衝突した際には、どの部位に当たっているか聞くが「わからない」と左側身体に無頓着で、諸動作で左手の不使用に気がつかないなど左側の非所属性から身体失認が認められた。左上下肢の体性感覚刺激に対して視覚的に代償し「見ればわかる」と発言された。高次脳機能検査では、注視点分析ツール（以下、@Attention）の検査から受動的注意機能の低下を認め、行動無視検査（以下、BIT）では通常検査108点、行動検査67点でCatherineBergerScale（以下、CBS）の検査結果上、身体空間・遠位空間の無視症状を認めた。

【病態解釈】

本症例は受動的注意の停滞による右側への過剰注意によって左空間の狭小化といった症状に加え、感覚障害と身体失認の症状に準じた身体認識の低下による左身体空間の無視が歩行時の左側への衝突の要因であると解釈した。

【治療アプローチ】

非麻痺側下肢のイメージをしてもらい、麻痺側下肢における位置・距離の関係性をイメージして左右下肢を比較する認知運動課題や遠位空間に対しては、レーザーポインターで無作為に照射し刺激を選択してもらう様な受動的注意課題を実施した。

【結果】

課題後3か月後、「右足に比べ左足が外に出ています」など自己身体における空間的關係性を体性感覚情報を基に比較する事が可能となった。@Attentionの検査でも、受動的注意機能が向上しCBSにおいても身体空間・遠位空間の無視症状が改善傾向であった。歩行時も物体の衝突が減少した事でT字杖歩行近位見守りレベルとなった。

【考察】

本症例は、身体を基準とした空間の再構築により左身体空間の認識が可能となった。さらに、受動的性注意機能が改善したことで歩行時に左側の衝突が軽減した。

【倫理的配慮、説明と同意】

発表に際して本症例には説明を行い、同意を得た。